

シリーズ 父の認知症 その15 (最終回)



病室に入ると、父は肩を激しく上下させて荒い呼吸をしています。

「父さん」と声をかけた私に言った父の第一声は「漢方薬は?」。「じゅんなさう。今日は持ってきてない」と言ひ私を指さし、「いちばん心配そうな顔をして…」と、平静を装ったはずの私の胸中を見抜いているのです。

父の異変に気づき、ナースコールしてくださいと同室の患者さんによれば、食後一時間ほどしての出来事だったとのこと。

食事のあと、寝かせるのが早すぎたのか、寝かせる角度が原因なのか……。

「娘さん、おられますか!」

私は看護師に呼ばれ、廊下に出ました。



看護師は何か奥歯にものが挟まったような言いまわしで、お父さんは口から食べることができない状態だが、自分たちは仕方なく食べさせたというようなことを私に告げました。

確かに、父の食欲に私たちは苦慮しましたが、食事再開は主治医の判断によるもの。責任逃れをしたいのだろうと感じました。

父は苦しさのあまり、まるで溺れているかのようにベッドの柵を握りしめて上へ上へ伸び上がろうとしたり、胸を掻きむしったりするので、見ている私たち家族も胸苦しい思いでした。

そんな極限状態のなかにあっても父は冷静さを失わず、「心臓の音が聴きたい」と、私に何度も訴えるので、聴診器を借りて父の胸に当てました。

「父さん、どう?」と訊く私に、「うん、悪いねえ…雑音がある…」。それから矢継ぎ早に「脈は?」「血圧は?」「点滴はどれくらい済んだ?」「いま何時?」と質問を浴びせたあと、「顔色悪いやろ?」と私に言いました。

足はチアノーゼでひどく紫色になっていましたが、酸素吸入により顔色は回復していたので、鏡に映して見せると「ああ、顔色は普通やねえ」と、我が身を客観的に観察しているのです。おまけに孫娘たちに向かって、「君たちは少し休みなさい。うごんでも食べてきなさい。」と、呑気ともとれることを言い、私たちを戸惑わせました。

それから母の手を握り、息も絶え絶えに「長い間、世話になったねえ」。

それを聞いた私は、父がすでに死を覚悟していることを悟りました。

母「あなた、もう一度元気になったら、車いすで移動できるタクシーがあるからね、それに乗ってうちに帰りましょうね。」「愛してるよ」。

父「うん、僕も」「最愛の妻」。

喘ぎながらも声を振り絞って言ったのです。まるでドラマを見ているような感覚でした。

半年前には母に向かって「おたく、どなた?」と言っていたのに、最期に珠玉の言葉を残してくれました。

このとき、父が逝くのは悲しいけれど、娘としての私の役割は果たせたのだと思いました。

そしてこれは中国医学の理論を学んだからこそ成し得たのだと確信しています。

父は九十年余の生涯を通じて、愛の深さと常に前向きに生きるこの大切さを身を持って教えてくれました。

二〇〇九年春から連載を始めたこのシリーズも今回をもって終了させていただきます。

最後までお読みいただき心からお礼申し上げます。



完